「THE 農業塾」～経営・栽培を次のステージへ～

近畿府県の農業塾では、経営感覚の育成、栽培技術の向上をめざして、支援を展開している。今回は、府県の農業塾の取り組みを紹介する。

淡路島から世界品質のタマネギを

淡路市　齋藤　亜紀美さん

【兵庫】淡路市でタマネギ栽培に取り組む㈱池上農場代表取締役の齋藤亜紀美（あきみ）さん（44）は、地元の淡路島で中学校の教員を勤めた後、結婚を機に夫の故郷・福島県で暮らし始めたが、東日本大震災で1歳の長女と実家に避難。その年に建設業を営む父が農業にも参入し、手伝ったのがタマネギ栽培だった。

以来、農業経営を本格的に学ぼうと「ひょうご農業ＭＢＡ塾」に参加し、「娘に食べさせても安心なタマネギを」との思いから、化学肥料と農薬を減らした栽培にも挑戦。「兵庫県認証食品」の認証を受け、タマネギ専業で14・5㌶の栽培面積へと拡大した。

全国屈指のタマネギ産地・淡路島で大規模栽培を支えるのは、ベトナムからの実習生を含む社員15人。ＭＢＡ塾で学んだ労務管理と経営感覚を生かして「社員とともに淡路島から世界品質のタマネギを栽培したい」と齋藤さんの夢がさらに膨らむ。

（山口昭彦）

世界品質のタマネギをめざす齋藤さん

地の利活かした経営を追求

京都市　福井　悠祐さん

【京都】「経営塾で同年代の仲間から刺激を受けて学んだおかげで、経営者としての考え方が鮮明になった」と語る京都市の福井悠祐さん（40）。2023年度の京都農業経営塾に参加して経営理念と事業計画が明確になり、売り上げと経費や作業時間を作物ごとに記録し分析した結果、正確に収支を把握して毎年度の改善目標を立てるようになった。

ＪＲ桂川駅と大型商業施設が近年誕生し、近隣の都市化が進む地域で、伝統野菜の京セリ、トマト、トウモロコシなどを栽培し、自宅前の直売所やスーパーの地場野菜コーナーで販売する福井さん。農業に興味を抱く非農家が近所に多く居住している利点を活かすため、農業体験農園部門を強化し、農園利用者との交流に力を入れている。

10年後を見通して、経営塾で農業体験農園運営プランを盛り込んだ経営計画を作成した福井さんは、自らの経験をもとに、若い農業者に塾への参加を呼びかけている。

（山下道弘）

農業体験農園を経営の柱に据えるためピザ窯を導入した福井さん

ビジョン明確化、労務管理を改善

紀の川市　長谷川　博さん

【和歌山】「経営の理念やビジョンを考える契機になりました」と話すのは、紀の川市のＨＡＰＩ ＦＡＲＭの長谷川博さん（42）。促成ナスや露地野菜を約1㌶栽培し、地元スーパーなどに出荷している。

県主催の研修会で旧「わかやま農業経営ＭＢＡ塾」を知り、2022年度に受講。正社員を雇用したことをきっかけに、経営理念や人材マネジメント部分の再検討が必要だと感じ、24年度に「わかやま農業経営塾」のステップアップ講座を受講した。

塾で学んだことを通じ、経営理念を明確化した。従業員の労務管理や雇用環境、資金管理の改善に取り組んでいる。

今後は妻の実家との経営統合や法人化、設備投資や規模拡大などをめざしている長谷川さん。「経営のめざすべきところを明確にできる。自身の経営のめざす方向性に悩んでいる農家はぜひ受講してみては」とメッセージを送る。

（田村健伍）

「ともに研さんすることで、経営について話せる仲間ができるのも大きい」と話す長谷川さん

経験活かし高品質のイチゴ栽培

広陵町　竹嶋　大一さん

【奈良】「イチゴ農家になるため、広陵町農業塾を受講し、農業委員会などからの支援があったおかげで、今の自分がある」と話すのは、広陵町の竹嶋大一（ひろかず）さん（51）だ。ビニールハウス7㌃で、古都華など3品種を高設栽培している。

地元で新規就農を考えていたところ、同町農業塾ではイチゴを学べると聞き、入塾した。2年間栽培技術を学んだ後、農業委員会から農地のあっせんを受けて、2021年4月に就農した。

病害虫の対応やハウス内における気温調整の適切な対応について、塾での学びを活かしている。

収量が安定してからは、圃場横に自身が設置する直売所「星乃苺（ほしのいちご）や」で販売している。甘くみずみずしいイチゴがインスタグラムで話題となり、県内外のお客さんが買いに来ている。

「リピーターをさらに増やすために、イチゴの質を今以上に高めたい。観光農園を開くのも夢」と竹嶋さんは意気込む。

（木村将史）

「一粒一粒キラキラと輝くようなおいしいイチゴを大切に育てている」と話す竹嶋さん

経営感覚を高め成長軌道めざす

甲賀市　佐伯　友樹さん

【滋賀】茶34㌶を生産する甲賀市の㈲グリーンティ土山（藤村春樹代表理事）で、主に経理と商品発送を担当する佐伯友樹（ゆうじゅ）さん（33）は、理事として経営知識が必要と感じ、「しがの農業経営塾」を2018年に受講し、修了している。

当時は、茶の市場動向に変化があり、買い手需要が、せん茶からてん茶に変わる時期だった。収穫適期が短い茶の生産現場で、てん茶生産は、比較的収穫期が長く生産量が多いため増益につながるが、新しい加工ラインを備えた設備投資が必要となる。

この時期、佐伯さんは、同経営塾で学んだ損益の計算や中期経営計画の検証が大切であることを、特に認識するようになったと振り返る。

現在は、てん茶生産への移行が進み生産量の大半を占めるようになった。「今後も、同塾への経営相談を続け、規模拡大と品質管理による買い手への信用と生産性を高めて内部留保の増大を図り、気候変動など生産環境の変化や市場動向にいち早く順応できるようにしたい」と抱負を語った。

（中野剛）

てん茶の加工ライン（レンガの乾燥室）と佐伯さん

新しいことに挑戦、人脈形成も

和泉市　辻井　義隆さん

【大阪】和泉市の農家の7代目で、多品目の野菜や果樹を生産する「つじい農園」の辻井義隆さん（46）は、府とＪＡグループ大阪が主催した農業経営塾「大阪アグリアカデミア」の受講をきっかけに、6次産業化に取り組んでいる。

同塾には、意欲的な同業者と意見交換する場を求めて応募した。

「受講前はとにかく規模の拡大を考えていた」と辻井さん。しかし、同塾での経営分析に基づいて雇用費を把握し経験から経営方針を転換した。

以前から実施していた体験農園に加えて、収益向上のため付加価値の創出に注力。2023年には「完熟パプリカ糀（こうじ）ソース」などの加工品を開発して販売を開始した。

アグリアカデミアの後継で昨年12月開講の「トップセールス農業経営セミナー」も受講した辻井さんは「加工品販売のノウハウと販路拡大が目標。常に新しいことに挑戦したい」と話す。

（林佑一郎）

「農業経営塾では同業者はもちろん異業種の人との人脈も作ることができた」と辻井さん

近畿

近畿総局
京都府農業会議
京都市上京区出水通油小路東入丁子風呂町104-2 府庁西別館内
075・441・3660

滋賀県支局　077・523・2439
大阪府支局　06・6941・2701
兵庫県支局　078・391・1221
奈良県支局　0742・22・1101
和歌山県支局　073・432・6114